様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３１日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：２００８～　２０１１
課題番号：２０４０１０１２
研究課題名（和文）　熱帯里山ガバナンスをめぐるステークホルダー間にみる利害関係とその背景
研究課題名（英文）　Relationships among stakeholders for Tropical Satoyama governance

研究代表者
市川　昌広（Ichikawa Masahiro）
高知大学・教育研究部自然科学系・教授
研究者番号：８０３９０７０６

研究成果の概要（和文）：
熱帯雨林の劣化・減少が進む中、その保全の核として先住民が長年暮らしに利用してきた熱帯里山に着目し、ガバナンスの鍵となるステークホルダーの利害関係について、インドネシアおよびマレーシアの３つの主研究サイトにおいて調査した。その結果、各研究サイトの調査結果より、熱帯里山のガバナンスについては、熱帯里山の「内」の内発的意向を基盤とした「外」とのつながりの構築が重要になってくること、およびその際の鍵として、「内」の有する知識、知恵などの「知」と外の「知」との融合による高度化を指摘した。

研究成果の概要（英文）：
Loss and degradation of tropical rain forests have progressed. A key of the conservation is management of Tropical Satoyama which has been managed by indigenous people living in and around the tropical rain forests. This research aims at relationship between stakeholders of the Tropical Satoyama, in order to examine well governance of the Satoyama. Three main research sites were established in Indonesia and Malaysia. As results of this research, concerning the governance of Tropical Satoyama, importance of linking between inside communities of the Satoyama is pointed out. A key issue in the linking is focusing to “knowledge” of the communities of the inside and outside

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	3,000,000	900,000	3,900,000
２００９年度	2,800,000	840,000	3,640,000
２０１０年度	2,800,000	840,000	3,640,000
２０１１年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
年度			
総　計	12,300,000	3,690,000	15,990,000

研究分野：人文学Ａ
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：先住民、熱帯雨林、生業、イバン人、ダヤック、日本の里山、過疎高齢化

１．研究開始当初の背景
（1）木材伐採やプランテーション開発による、とどまるところを知らない熱帯雨林の劣化・減少。それに伴う、生態系・生物多様性の劣化の問題。
（2）日本の里山の環境保全機能への着目と

諸外国の「里山」への着目(生物多様性条約COP10における「里山イニシアティブ」など)。
(3) 熱帯にも日本の里山と同様、人々の暮らしを通じて形成されてきた森や農地からなる「熱帯里山」がある。
(4) ただし、熱帯里山をめぐっては、住民、開発者(企業)、行政などさまざまなステークホルダーの存在によって、その管理は必ずしも良好ではない。

２．研究の目的
以下に示す項目について、ステークホルダーが異なる調査サイトでフィールドワークをおこなった。
(1)熱帯里山の価値：　熱帯里山がグローバル社会、国家、企業、先住民などに対してどのような物質的・精神的な価値を提供するのか。
(2) ステークホルダー間の利害関係：　各サイトの熱帯里山にかかわるステークホルダー間の関係、利害関係の構造
(3)調査サイト間比較：　いくつかの社会的条件が異なる地点を比較することにより、熱帯里山のガバナンスに必要な条件をより一般化した形で導き出す。

３．研究の方法
(1)　調査サイトの設定：　マレーシア・ヌグリスビラン州、サラワク州、インドネシア・東カリマンタン州、中部スラウェシ州を設定した。当初設定した上記に加え、比較研究のためにインドネシア・ランプン州やタイの熱帯里山、日本の里山(高知県)を加えた。
(2)　聞き取り・観察法、地元の文献収集：熱帯里山の価値、ステークホルダーの利害関係については、関係者(地元住民、地方行政、開発企業など)への聞き取りや文研究をおこなう。
(4)　実践的手法：　研究者自らが実践的に熱帯里山の管理にかかわることによって、通常、可視しづらいステークホルダー間の関係についてより深くみる。
(5) 生態学的調査：　熱帯里山の生態学的役割・機能を明らかにする。
(6)ワークショップ等の開催：　サイト間比較や調査結果の概念化のためにワークショップ等を開催する。

４．研究成果
(1)インドネシア・東カリマンタン州での成果：　典型的な熱帯里山の景観を大きく変える大規模なアブラヤシ農園開発計画の導入に揺れる東カリマンタン州マハカム川中上流域の地域発展戦略を検討した。
インドネシアでは 2000 年の地方分権化以降、多くの村でアブラヤシ農園の開発が進んでいる。アブラヤシ農園開発は農家を実質的な契約労働者とし、広大な慣習利用林の提供を迫るため、地域社会に強いる負担が大きい。地域住民は衛星農園（農園の 20%）に対して土地所有権を得るものの、中核農園（農園の 80%）となった村の慣習地が 35 年後に農園事業権終了後に戻ってくるかどうか確約はない。
一方、この地域では住民による自主的なゴム植林が進み、「農園活性化プログラム」のもう１つの柱であるゴム農園プログラムが積極的に受け入れられようとしている。家計調査から、それは人々の生活様式と森林との共生関係を保ちながら、所得源の多様化と集約化による地域経済の発展を実現する可能性が高いことを示した。農園開発の受け入れか拒否かという二者択一ではない第三の道として「緩やかな産業化」戦略を提示することができた。

(2)インドネシア・中部スラウェシ州での成果：　中スラウェシ州の山村トンプを主な調査地として、村人、地元の実践者、日本の研究者・専門家らが協働し、村の焼畑実践にめぐる記録作業を実施した。トンプ村は、焼畑慣行が色濃く残る村の一つであるが、森林法上は居住も耕作も認められない森林区域内に位置している。
映像・文章・絵を通じた記録作業では、焼畑作業や儀礼に表れた村人の慣習的森林利用と自然観を描き出すとともに、村人や地元の実践者らが山村に受け継がれてきた慣行や文化を見つめなおし、その変化と現状を再確認し、今後の熱帯里山の利用・管理のあり方を議論するメディアとなることを目指した。成果は DVD と本（インドネシア語）で出版予定である。また、地域 NGO,行政、研究者等によるワークショップを開催する。本研究での成果を題材に地元政府関係者と、ガバナンスのあり方をさらに議論していく。

(3)マレーシア・サラワク州での成果：　サラワク州北東部のバラム川流域を調査サイトとした。サラワクは、一般には深い森におおわれ、都市化の進行も遅く、農山村が中心の地域と認識されがちな熱帯雨林気候下にあると考えられている。しかし、近年、都市化の進行や道路網の整備などに伴い、農山村から多くの人々が流出しており、人口減少・高齢化の兆しと呼べるような状況がみられた。
バラム川中・上流域全般的に、ロングハウスの空き居室が１～３割みられるのは普通で、高いところでは７割が空き室のロングハウスもある。一方で、活況を呈しているロングハウスもあり、それと空き室率の高いロングハウスが近接している場合もある。調査の結果、調査地において、村によって人口に多

寡が生じる要因として、ここで取り上げた事例から３つあげられる。教育、道路、リーダーシップである。

教育については、教育程度が高いと、都市で公務員や企業など高収入の職を得ることができた。都市で安定した生活を築き、村から親を呼び寄せることにより、空き居室率は高くなっていた。道路については、伐採道路が建設されたことにより、そこへ人が集まるようになり、活況を呈する村がある一方、道路がない村では都会に出ていく人々が多くなった。リーダーシップについては、教育や村落開発に大きな影響を与えるキリスト教団への村の入信や、伐採会社に積極的に村びとの雇用を頼むなどリーダーが外部社会との関わり方で果たす役割が大きい。

今後は熱帯里山での人口減少・高齢化による過少利用の影響が管理に大きく関わってくることが示唆された。

(4)その他の調査地からの成果：　研究期間中には、マレーシア・ヌグリスビラン州、インドネシア・ランプン州、タイ、高知県大豊町などにおいて比較研究のために調査された。

ヌグリスビラン州では、先住民オランアスリのいくつかの村落において、エコツーリズムの取り組みを行っている村、おもに出稼ぎによって生計を立てている村があり、その概要の聞き取りを行った。ランプン州では、ジャワからの移民が創った果樹・有用樹混合林を対象とし、その所有が村人と国家との間で揺れ動く様が調査された。高知県ではまったく自然・社会環境が熱帯とは異なるが、過疎高齢化が進み、里山資源の過少利用の観点からは、地域活性化、伝統知識、生物多様性保全などの論点が示唆された。

伝統知識の保全については中部スラウェシにおいて実践的取り組みをおこなっており、論文および収集された知識の成果が発行される予定である。地域活性化については、日本の取り組み例をサラワク州の現地の関係者と議論した結果、具体的な取り組みの開始に結びついている。

(5)研究拠点の設置：　本研究を通じて熱帯里山ガバナンス研究を今後も継続的におこなえる研究拠点が形成された。研究開始以後、いくつかの調査デザインの修正があったが、上記の 3 調査地((2)、(3)、(4))には全調査期間を通じインテンシブな研究がおこなわれた。研究成果も豊富で、今後の継続研究がおこなわれる。

(6)熱帯里山のステークホルダー間の利害関係：　主調査地間およびタイなどを含めた比較検討の結果、熱帯里山のガバナンスについてつぎの２点が指摘された。第１点は、東南アジアの大陸部・島嶼部双方における里山的な資源利用の傾向に関して広く実態の把握を試みた結果、里山的利用が、経済・社会・政策等の変化によって急速に変容しつつあることである。その経路や変容の速度は一般に想定されているほど単純ではないことが明らかになった。

第２点は、歴史的な経路に関するサーベイと考察である。ミクロレベルでは多様であった里山的利用の変容は、よりマクロで政策的な視点からみれば、一部で制度の現地化の試みがみられたにもかかわらず、全体として近代化以降画一的・普遍的な制度導入へと進んでいたこと、そしてこれがひとつの原因となって、制度と実態の乖離が温帯地域に比べて激しくなったことが明らかになった。

(7)熱帯里山のガバナンスの今後：　複数の調査地においておこなわれた本研究の結果から、地域固有の違いは当然あるが、熱帯里山の管理を考えていく上でのポイントが２点指摘された。

ひとつは熱帯里山にもっとも近い地元先住民の内発的な意思や行動を基盤とした行政をはじめとする「外」との関係である。本研究では、都市と農村あるいは生産地と消費地をつなぐ新たな関係のあり方として「関係価値」という概念を提唱した。また、コモンズ関係の研究会にて、日本とインドネシアの「里山」の経験をつなぐ可能性について報告・議論した。熱帯里山の「内」と「外」をつなぐ動きは、今後重要な試みとなる。

第２点目は、熱帯里山の「内」を観たり、「外」と繋ぐ際の鍵として、熱帯里山に関する知識、知能、知恵といった「知」、「外」の人びとが持つ「知」の融合による高度化があげられ、そのような「知」へ着目した研究の重要性が指摘された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 26 件）

① Ubukata, F. Exploring Villagers - Resources Network: Differences in the Pattern of Natural Resource Use in Yasothon, Thailand. The Journal of Forest Management　査読有　2012 印刷中

②河合真之・井上真　大規模アブラヤシ農園開発に代わる「緩やかな産業化」の可能性:東カリマンタン州マハカム川中上流域を事例として. 林業経済６３－７　査読有　2010　17-30

③Ichikawa M.　Changes and diversity in

rules of natural-resource tenure by the Iban of Sarawak, East Malaysia: An evaluation from the viewpoint of biodiversity conservation. Asian and African Area Studies8. 査読有. 2008. 1－21

〔学会発表〕(計 34 件)

① Inoue Makoto Prototype Design Guidelines for 'Collaborative Governance' of Natural Resource 13th Biennial Conference of the International Association for the Study of the Commons 2011.1.12 Hyderabad, India

② Ubukata, F Determinant Factors of Communal Forest Management: Cases in Yasothon, Northeast Thailand International Workshop on Local Conservation and Sustainable Use of Swamp Forest in Tropical Asia 2009. 12. 19 Ranong、Thailand

③Ichikawa M. A comparison of *Satoyama* (anthropogenic forests-based landscape) between Borneo and Japan Borneo Research Council 9th Biennial International Conference. 2008.7.29 Kota Kinabaru, Malaysia

〔図書〕(計 18 件)

①市川昌広・生方史数・内藤大輔編 人文書院 熱帯アジアの人々と森林管理制度――現場からのガバナンス論 2010 278

②島上宗子 日本貿易振興機構アジア経済研究所 東南アジアにおける自治体ガバナンスの比較研究 2010 110-127

③三俣学・菅豊・井上真編 ミネルヴァ書房 ローカル・コモンズの可能性－自治と環境の新たな関係 2010 270

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

①一般社団法人あいあいネットのブログ（http://i-i-net.seesaa.net/）を通じて、調査の一部を発信。

② http://www.geocities.jp/nuta_otoyo_kochi/index.html を通じて市川の活動の発信。

６．研究組織

(1)研究代表者

市川 昌広(Ichikawa Masahiro)
高知大学・教育研究部・自然科学系・教授
研究者番号：80390706

(2)研究分担者

井上 真（Inoue Makoto）
東京大学・農業生命科学研究科・教授
研究者番号：10232555

島上 宗子(Shimagami Motoko)
京都大学・生存基盤科学研究ユニット・研究員
研究者番号：90447988

阿部 健一(Abe Kenichi)
総合地球環境学研究所・研究推進戦略センター・教授
研究者番号：80222644

嶋村 鉄也(Shimamura Tetsuya)
愛媛大学・農学部・准教授
研究者番号：80447987

(3)連携研究者

生方 史数(Ubukata Fumikazu)
岡山大学・環境生命科学研究科・准教授
研究者番号：30447990